

2017年度夏期コース報告

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40週間の年間コースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は2017年6月22日（木）より8月9日（水）まで実施した。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースも年間コースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に2年から3年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、本コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これも年間コースと同様である。

近年は、前途有望であり上級日本語の集中的教育を受けることを熱望しながら、様々な事情で年間コースへの入学が困難な学生が多い。そこで、そのような年間コース潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースは年間コースの簡約版とも言うべき内容になっている¹。

一方で、本コースを年間コースから大きく区別する特徴は、教員構成である。夏期コースでは、年間コースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段は海外、主に米国で教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、イエール大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、スワスマリア大学の教員が参加した。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度の受講者は39名であった（うち、家庭の急な事情により途中で帰国を余儀なくされた学生1名）。内訳は、大学院生または大学院入学予定36名、社会人2名、大学学部生が1名である。受講者は、コース初日の試験により習熟度や得手不得手の傾向が判定され、それに応じて5つのクラスに分けられる²。各クラスは学生7～9名で、それぞれ、1名の担任と1名もしくは2名の授業担当講師が運営した。

夏期コースは年間コースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者のうち9名は「サマー・レコメンデッド」（年間コースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生）であった。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、全てのクラスにおいて、学生によるスピーチとそれに関するクラス全員での討論、NHK ニュースなどのビデオ素材を用いた聴き取りと内容報告の練習、日本語教科書や新聞、雑誌、書籍を用いた読解練習とそれを通じた語彙・表現力の増強、そして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『待遇表現』(The Japan Times)を用いた敬語の習得訓練が行われる。作文の宿題も定期的に課される。また、日本文化と社会を体験できる機会（校外学習）も5回設けられている。コースの最後には、学んだ日本語を生かし、学生が自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会を開く。本コースは成績や単位を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行う。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話し、聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるといふ大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間（校外学習を除く）の中でどの技能にどの程度の時間をかけるか、教材として何をを用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が決定している。担任は、教育内容をコース開始前に計画するが、自クラスの学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整を行う。

また、学生1人あたり全コースを通じて1時間、通常授業の時間枠の中で教員との個人授業の時間を設けている。学生1人あたり1時間というのは、教員から見れば授業8時間分ということである（1クラスを学生8名とした場合）。ある学生が教員の指導を受けている時間、他の学生は自習をする。この学生にとっての1時間、教員にとっての8時間をコースの中でどう配分し、その時間で何をするかはクラスの担任がそれぞれのカリキュラムや学生の要望に応じて決定している。例えば後述の「夏草」クラスでは1人30分ずつの面談を2回行い、中間試験のフィードバックと期末発表のための準備に活用した。

このほか、大学生インターン（フェリス女子大学、神奈川大学）の協力を得て、授業時間外に自由会話の時間を設けた。今年の夏期コースでは、インターンの人数等の事情をかんがみ、授業以外でも日本語を話す時間を持つことが望ましいと教員が判断した、会話力の弱い学生のみが自由会話の活動に参加した。協力してくれたインターン生には、この場を借りて深く感謝を申し上げる。

校外学習の詳細等、上記以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

本コースは2～3年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、実際に集まってくる学生の能力は多様であり、前節4-1で述べた全クラス共通の活動を行うにしても、読解教材のレベルや量などはクラスごとに異なる。また、文法の扱い方もクラスにより差がある。本節では、筆者が講師として参加した「夏草」クラスの授業の実際を参考として挙げる。このクラスは本夏期コースで上から2番目のレベルである。初級～中級までの学習内容が概ね身につけており、読解と作文の能力は比較的に高いが、場面や話し相手に応じて柔軟に文体や表現を変える能力（敬語、文語、口語の使い分け）は未熟であり、社会問題について意見を交わすなどの高度な会話にも慣れておらず、使用語彙の幅が狭い学生が集まった。そこで、基本的な文法ミスを減らすこと、語彙力と表現力を増強すること、学会発表やパネルで用いられるような丁寧でかたい発話スタイルに慣れること、そして、意見陳述、反論、依頼など、相手との社会的関係に応じて繊細な配慮が求められる言語行動を失礼なく遂行できるようになることをクラスの目標とした。教員はさらに、多様な専門・関心を持った学生が集まっているというIUCの強みを生かし、発表などでクラスに持ち込まれたテーマについて、それぞれの立場から多角的に論じるよう学生に促した。

1 時間目（9:40～10:30）

- ・ミニ発表＋討論：1日1人の学生が2分程度のスピーチを準備し、発表後、質疑応答。
- ・ニュース報告：前日にNHKニュース7を視聴し、各学生が興味を持ったニュースを報告して意見を述べた。話題によってはクラス全体での議論へと発展することもあった。
- ・言葉の使い方テスト：前日の読解授業（2時間目参照）等で扱った単語や表現、文型の読み方、意味、使い方を、口頭での例文の作成を通して確認した。
- ・KICテスト：『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』とそのWebアプリケーション版である[WebKIC](#)（注1参照）を学生に自習させた上で、WebKICの機能を使って作成したペーパーテスト（単語を提示して、その読み方を問うもの。あるいは読みを提示して漢字を書かせるもの）を行った。

2 時間目 (10:40~11:50) 3

- ・ 読解演習：課題の読み物の意味を確認しつつ、そこに含まれている重要表現・文型を使って例文を作る練習をした。また、読み物の内容についての意見交換も時間の許す限り行った。読解練習で扱った主な記事は以下の通りである。
- ・ 東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）から一部抜粋
- ・ 村上春樹「納屋を焼く」
- ・ 三橋正「『神道』の成立について」
- ・ 安部公房「棒」

3 時間目 (12:00~12:30)

- ・ 待遇表現：前述の『待遇表現』テキストを用いた待遇表現の練習と、梁晶子・大木理恵・小松由佳『日本語 Eメールの書き方 Writing E-mails in Japanese』（The Japan Times）を用いた電子メールの書き方の練習。

4 時間目 (13:30~14:20)

- ・ 月曜～水曜：討議責任者（1日1人が順番に担当する）の決めた話題について、クラスで討論を行った。責任者は討論のための資料を準備して自分の見解を発表し（5～10分程度のスピーチ）、討論を主導した。
- ・ 木曜：その週に学んだ語彙・表現・漢字の使い方の復習と、WebKICの文脈クイズ作成機能を使って作成した書き取りテスト。
- ・ 金曜：校外学習。ただし最後の金曜日は通常授業で、試験と口頭発表会のための準備にあてた。

4-3 他4クラスの概略

本節では、レベル順に各クラスの概略を述べる。

「夏海」

このクラスに集まった学生は日常的な会話の交換や一般的な社会問題についての意見陳述は既に十分可能であり、予習シートを用いて内容を正確に理解できているかを確認しながらであれば、専門書を読めるレベルの読解力も身につけていた。自分の専門の分野（あるいはそれ以外も）に関して具体的・抽象的な議論を自在に行える日本語力を身につけることが彼らの目的となる。

教員はミニスピーチとニュース報告を頻繁に課した上、さらに学生自身の専門をテーマとした長めの発表も数度行わせた。読解学習では市販の日本語教科書を一切使わず、社会

学や人類学、民俗学、文学の専門書、さらには短編小説など、幅広いテーマ、ジャンルの記事を扱った。1日に授業でカバーした分量は5～10ページ程度と非常に多い。他にも、映画を見て内容について討論する、上級学習者が誤りがちな文法事項（連用中止形の用い方など）を練習するなど、学生の様々なニーズと知的好奇心に対応する柔軟な授業展開を行った。

「夏柳」

プレイスメントテストの結果から、読解力に比して会話力が高いと判断された学生を集めた。読解教材としては上述の『文化へのまなざし』を扱い、中級・上級レベルの読解ならびに文法の学習を行う一方で、本センター作成の『文法ノート』を用いて初級文法の復習も行った。学生は終始意欲的で、教員の高い要求に応じて全ての活動に積極的に取り組んだ。

「夏山」

学生間の能力差が比較的大きく、クラス運営は困難であったが、教員の柔軟な対応によって学生それぞれが自分の弱点を克服するために努力を重ねた。読解教材としてはアカデミックジャパニーズ研究会編著『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（アルク）や『文化へのまなざし』等の市販教科書をはじめ、雑誌や書籍から抜粋した記事を用いた。これに加え、担任が独自に編集したテキストによる初級文法の復習やテレビ番組の視聴を課すなど、学生への要求の高いカリキュラムであったが、学生は最後まで真摯に学習に取り組んだ。

「夏鳥」

本クラスでは、学生の会話力の弱さと初級文法の定着不足が顕著であり、基本文法を用いた単文が正確に産出できるようにすることを最大の目標とした。

文法の授業のためには友松悦子『初級日本語文法総まとめポイント20』（スリーエーネットワーク）、読解の授業のためには『留学生の日本語①』とスリーエーネットワーク『中級を学ぼう 中級中期』を用いた。『留学生の日本語①』は会話や作文の指導にも活用した。また、NPO 法人多言語多読監修『レベル別日本語多読ライブラリー（にほんご よむよむ文庫）』を用い、速読の練習も行った。

さらに、『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』とそのWebアプリケーション版である [WebKIC](#)（注1参照）を用いた漢字学習とテストもカリキュラムに取り入れた。

授業での厳しい誤用チェック、そして大量の宿題と、学生に対する要求の非常に高いクラスであったが、学生は十分に教員の期待に応えた。

5 受講者によるコース評価

今年度受講者のアンケートからは、教育内容と教職員に対する高いレベルの満足度が伺える。34名の回答者のうち、コースの4段階評価を Excellent とした者は19名、Good とした者は15名、Fair あるいは Poor とした者はゼロであった。また、回答者全てが本コースを他の学生に推薦する意志を表明している⁴。校外学習に対する満足度もきわめて高い。

6 おわりに

今年の夏期コースは大きい問題もなく終了したといえるが、平穩無事に日々が過ぎたというわけではない。学生はそれぞれに忙しい研究や仕事の合間を縫い、集中的に日本語を学べる機会はこの7週間しかない、という切実な意欲を持って本コースに参加する。いわば「短期決戦」としての夏期コース独特の緊張感を教職員は受け止め、それに応える指導力を発揮しなければならない。今年度のコースが学生からこれほどの高評価を得ることができたのは、各教員が学生の多様で困難な要求を受け入れながらも、クラス活動や課題について明確な方針を堅持し、力強いリーダーシップのもとでコースを運営した結果に他ならない。

また、本年度からハラスメントや剽窃行為などの学生の不品行に対して本センターがどのような態度を持っており、どのような対処を取るかが明確に文書化され (Respectful Environment Statement ならびに Student Code of Conduct)、コース開始にあたって学生に通知されるようになった。これにより、真摯な学生が安心して学習に集中できる環境がさらに整ったといえる。

一方で、ごく少数ではあるが、本コースがこれほどに集中的で学生に対する要求の高いプログラムであることを事前に知らず、覚悟ができていない学生が参加することによって、その学生自身にもクラスメートにも、そして担当教員にも大きな負担が生じる場合がある。このような事態に陥らないよう、参加希望者には本コースの特徴を事前に十分に周知しておく必要があるだろう。

毎年ここで述べていることだが、筆者は「7週間、とても勉強になった。しかし、もっと勉強が必要だと分かった。次はぜひ年間コースに参加したい」という感想を学生が持つことが夏期コースの最大の成功だと考えている。今年も多くの学生が年間コースへの参加希望を表明したことは喜ばしい限りである。

今後も、優れた学生のニーズを満たす密度の濃い教育と、校外学習等諸活動の充実を追求していく所存である。

(あきざわ ともたろう / 2010～2017年度夏期コース主任)

注

- 1 ただし、年間コースで必須科目である SKIP (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは行わなかった。学生には、授業以外にもし時間があれば、本センター発行の『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』とその Web アプリケーション版である [WebKIC](#) を用いて常用漢字の学習をするよう勧めた。これらの漢字学習教材は、後述の夏海クラスと夏草クラスの授業でも一部用いられた。
- 2 例年は全6クラスを開講しているが、受講者数を鑑み、本年度は5クラスとした。
- 3 夏草クラスでは、読解演習により多くの時間を割くため、2時間目の授業時間を延長し、逆に3時間目（待遇表現）を短縮した。
- 4 ただし、うち1名は留保付きであった。

資料：2017年度夏期コース 校外学習等

6月

- 22 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験（筆記、聴解、発話）（9:40～12:00）
- 23 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練（9:40～12:30）、歓迎会（12:30～14:30）
- 26 (月) 授業開始
- 30 (金) 校外学習① 鎌倉の日 午前中はクラス毎に鎌倉見学、午後は建長寺にて座禅研修

7月

- 7 (金) 校外学習② 歌舞伎鑑賞教室「鬼一法眼三略巻 一條大蔵譚」
- 14 (金) 中間試験（9:40～12:30）、校外学習③ 横浜の日 4班に分かれ横浜市内を見学
 - A. 日産横浜工場、B. 横浜開港資料館、C. 神奈川近代文学館
 - D. 横浜地方防災センター
- 21 (金) 校外学習④ 東京の日 3班に分かれ東京を見学
 - A. 東京地方検察庁、B. 東京国立近代美術館、C. 明治神宮
- 28 (金) 校外学習⑤ クラス単位で自由行動

8月

- 7 (月) 最終試験（9:40～12:30） 午後は発表会準備
- 8 (火) 口頭発表会（9:40～14:20）
 - 1人あたり質疑応答を含め15分、3箇所に分かれ同時開催
- 9 (水) クラス担任との個人面談（9:40～12:30）、修了式と祝賀会（12:30～14:30）